

---

# 雨の中で

刹音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の中で

### 【コード】

N6119N

### 【作者名】

剝音

### 【あらすじ】

雨の中、私は一人で公園にベンチに座っていた。

雨が降る公園のベンチに、私は一人で座っていた。傘をさして居るわけでも、レインコートを着ているわけでもない私の服は雨に濡れ、元の色の判別がつかなくなっている。ふと空を見上げると、バケツをひっくり返したような雨が容赦なく私の顔に落ちてくる。そんな雨を気にするわけでもなく、私は空の奥をじっと見つめた。

この空は私の心みたいだと思う。厚い雲で覆われたこの空はどんなに見つめても先が見えない。

こんな空を見ると、私はあの日のことを思い出さずにはいられない。そして、あの日を思い出すと無意識のうちに頭の中を侵食し始める疑問。

どうしてこの世界には出会いがあり、別れがあるのか。

その疑問は酷く殺伐としたもので、答えもすぐ近くにあった。普通の人ならその答えを最初から知っていて疑問を抱くこともないのかもしれない。だが、私はその答えを知らない。心の小さな私にはその答えを見つけることも叶わない。

私はただ、子供の我侭のように安直に思ってしまうのだ。

出会うなら別れなどなければいい。  
別れるなら出会わなければいい、と。

私は一人そんなことを考えながら、雨の中思い出されていく記憶を目をつぶってゆっくりと静かに辿った。

確かあれば、私が高校に進学して一ヶ月が過ぎようとしていた頃だったと思う。最初は高校の授業に追いつくことで精一杯だった私は遊ぶ時間どころか寝る時間さえも限りなく少なかった。

そんな私も、それなりに余裕が出来てきて、家の近くにある喫茶店でバイトを始めたんだ。そのバイト先にいたのは、私より5つ年上の青年。その喫茶店を営んでいる夫婦の一人息子の君だった。

君は小遣い稼ぎといっては、時折喫茶店の手伝いをしていた。笑顔で接客したり、オーダーされたものをすぐに運んでいく君に、最初に感じたのは恋なんかじゃなくて憧れだったと思う。

私もああいう風になりたい！  
そんな気持ち心があつたから。

でも、私は不器用でお皿やグラスを度々割ってしまうことがあつた。

恥ずかしくて、情けなくて泣きそうになってしまったとき、私のすぐそばで片づけを手伝いながら笑顔で励ましてくれたのは君だった。初オーダーで困っていたとき、さりげなく手助けをしてくれたのも君だった。

君はとても優しい人だった。外側ばかりの優しい人なんかじゃなくて本当に内面から優しい人。心のおくから優しい人。いまだき珍しくくらいお人よしな人だって私は思った。他の人がどう思うのかなんて知らないけど、私はそう思えた。

そんな君を好きになってしまふのに、そう時間はかからなかった。もしかしたら、私が君を好きだと頭で理解する前から心は君に恋していたのかもしれない。

でも、この気持ちが叶うはずがないということも、頭で理解していた。君が喫茶店以外でどんな人と付き合っているかなんて聞けるわけもないから知らなかったけど、君が喫茶店に出ると、女性客の入りが良くなつたからそれだけでも君が人気なのは一目瞭然だった。

から。

だから私は、『気が利くバイトの子』という、少しでも君に近いポジションになりたくて一生懸命に働いた。それでも幾度となく失敗をしてしまう私を、君は怒らず見捨てずにいつも笑顔で励ましてくれた。

君にしてみれば、励ますなんてことはとても些細なことだったかもしれないけど、私にしてみればそれは大きな勇気と力になって、頑張ろうという気持ちの糧になっていた。

そんな私を、オーナーも認めてくれたのか、半ば諦めていたのがクビにされることはなかった。減給されたのはちよつと痛かったが、あんなにものを壊して減給だけですんだのだからオーナーも君と同じで優しいんだなあって思ったんだ。

それから私は毎日のようにバイトをした。成績が下がるとバイトをやめなくちゃいけないから勉強とバイトを両立していった。毎日がすごく疲れたけど、君に会えると思えばそのことは何一つ苦にならなかった。

君もその頃は、今までよりも喫茶店の手伝いをする回数が格段に増えていて、私たちはほぼ毎日顔を見合わせるようになった。君は手間のかかる私がいってどう思ったのかは分からないけど、私にはこの上ないほどの至福のひと時だった。

初めて私がバイトをした日から、数ヶ月のときが過ぎた。季節は冬へと移り変わり、クリスマスが近づいてきていた。その頃になると、どこもかしこもクリスマスのイルミネーションでチカチカと輝いていた。もちろん喫茶店も例外ではない。

喫茶店の中は、クリスマスの小さな飾りが丁度良いバランスで飾られていた。一つ一つの飾りが自己主張をしているわけでもなく、だからといって陰がさしているというわけでもないその飾り方はどこか優しさと暖かさが感じられた。喫茶店の隅の方には、私の胸元あたりまでの高さのある少し小さめのツリーが飾ってあった。街の

中央公園にある大きなツリーも好きだけど、私は『家』を感じさせ  
てくれるような小さめのツリーが好きだった。特に、喫茶店内に飾  
つてあるツリーは私の理想のツリーにぴったりで、客のいないとき  
はこのツリーをじっと眺めていた。

そんなバイトの日々が過ぎ、クリスマス当日になった。

もちろん私は朝からバイトを入れていて、喫茶店が始まる30分  
前からスタンバイをしていた。まだ開店時間じゃないからもちろん  
お客はいない。私はいつもどおりにツリーの前に行き、じっとツリ  
ーを眺めていた。すると、ふいに後ろから呼びかけられた。振り向  
いた先にいるのは君だった。

「今日の夜、もしも暇だったらさ一緒に街のツリー見に行かない？  
ほら、今日クリスマスだし。どうかな？」

思いがけもしなかった君からの誘いを私が断るはずがない。もち  
ろん私は、行きます。と返事をした。君から誘ってくれたというこ  
とがとても嬉しくて嬉しくて、なぜだか涙が出てきそうになって実  
は少し慌てたんだっけ。

その夜に君と見に行ったツリーは、今まで私がみたどんなツリー  
よりも綺麗だった。

そんな綺麗なツリーの前で、君は私に言ってくれた。

「よかつたら、俺と付き合ってください」

こんな夢のような場所で、君から私にささげられた夢のような言  
葉。私ね、本気でこれは夢なんだって思ったの。起きたらきつと忘  
れてしまう夢。だから、人目も気にせずに君に飛びついて抱きしめ  
ることができたんだ。

「私も好きです」

小さく呟いたその言葉が、たくさんの人話し声が渦巻くあの場  
所で聞こえたのかどうか私は分からないけど、そのあと、君も私を  
抱きしめてくれた。恥ずかしいってそんな気持ちよりも、私の心を  
支配していたのは君と心が通じ合えた充実感と、夢ならもう一生覚  
めないでという無理な願いだった。

あの夢のようなクリスマスの夜はもちろん夢なんてことはなかった。朝起きても、君と私が両想いだったという事実と付き合うことになったという事実は変わっていなかった。

クリスマスの次の日から、私と君は今まで以上に一緒にいるようになった。休日も一緒に買い物に行ったりして、本当に毎日が楽しくて幸せだった。この幸せがずっとずっと続けばいいと、はかないことを心の中で願っていた。

でも、その願いは叶うわけもない。

私にとって、すでに当たり前となっていた生活や幸せはあつという間に脆くも崩れ去ってしまった。大好きな君の・・・死によつて交通事故だとオーナー聞かされた。横断歩道を横切ろうとしたとき、居眠り運転をしていた大型のトラックに轢かれてほぼ即死だった。

君が事故にあつた日は、私たちが出会ってから三年の目の春だった。たったの三年の月日で作られたたくさんの幸せの分、私はとても不幸になった。君に会えるだけで幸せになっていた私はもう二度と君に会うことは出来ないのだとわかったから。

君の葬儀は、私とオーナー夫妻、その親戚とでしめやかにおこなわれた。その日は君の姿がこの世から消えるのを悲しんでいるような激しい雨の日だった。君は私の笑ってる顔が好きだと言ったことがある。笑うことなんて出来そうにないからせめて君と本当にさよならをしようまで泣くのはよそうと雨の中誓ったんだ。

短いお経が終わり、私たちは火葬場へと向かった。建物の中に入ると、激しい雨の音は小さくなった。カツカツと歩く無機質な音ばかりが建物を支配していった。

少したつてから、最もおとずれて欲しくない瞬間が来た。君の眠る棺が火葬炉の中へと吸い込まれていく。最後に火葬炉の扉がゆくりと重々しくしまると君の姿が完全に見えなくなった。周りのすすり泣きの声を聞きながら私は足音を忍ばせて建物の外へと出た。外は土砂降りの雨だ。傘を持ってるわけでも、レインコートを着て

るわけでもないから、私の喪服は激しい雨に打たれ黒い色をより一層深い黒へと変えた。

私の服と同じくらいに真っ黒な空を見上げると、顔に勢いよく雨が降りかかった。まるで私だけしかいないのではないかという雨の中で、私はしゃくりあげて子供のように泣いた。

今までにないほどの涙を流しているのに、その涙を拭ってくれる君はもういない。変わりに、私と同じように泣いている雨が、私の涙を自らの雨水と共にこぼしていく。

何で君が死ななければいけないの？

他の人じゃいけなかったの？

どうして私から君を奪うの？

君がいないなら私がいる意味もないじゃない

こんな世界にいても幸せがあるわけじゃないじゃない  
どうして、どうして？

せつかく出会えた何よりも大切な人となんで別れなければいけないの？

たくさん悲しい感情が体中を駆け巡る。その勢いと圧迫感で息をすることも出来ない。

雨がさらに激しくなった。

私の胸はさらに締め付けられていく。泣いても泣いても涙は止まることはない。永遠という一瞬が過ぎようとした頃、顔に降りかかる雨がふいに遮られた。雨を遮ったのは黒い傘だった。空を見ていた視線を傘の方に向けると、そこにいたのはオーナーの奥さんだった。

「これ・・・」

奥さんは潤んでいる目を薄く開きながら、私のほうの手を出した。その手の中には、青い小さな箱があった。

「息子が貴女に贈ろうとしたものよ」

私は雨にぬれる両手でその箱を包むようにして受け取った。胸の奥のほうに熱くてチリチリとした痛みを感じながら、そっとその箱を開けた。

箱の中に入っていたのは指輪だった。綺麗な指輪が、寂しそうに箱の中で眠っていた。

だらしのない、情けないと思いながら私は箱を両手で強く包み込みその場にうずくまって泣いてしまった。

君から私に贈られた最後の贈り物は、今まで贈られたどんなものよりも優しく、暖かくて、綺麗で、胸が裂けそうになるほどにとっても哀しい贈り物だったんだ。

+++

私はここまでで記憶を辿ることをやめた。君を感じられない記憶を辿ったところで何の意味も持たないからだ。それに、これ以上を思い出すのは私一人では辛すぎた。

目を閉じてベンチでボーっとしている私の頬を優しい風がなでた。ゆっくりと目を開けると、目に飛び込んできたまぶしい光に一瞬顔をしかめた。いつのまにかあの激しい雨はやみ、空にはキラキラとした七色の虹がかかっていた。

今までの記憶を辿ったところで、私の疑問の答え見つからない。私自身が見つつけようという努力をしていないのだから仕方がない。はつきり言ってそんな答えは見つからなくてもいいと思ってる。その答えがどんなものであれ、きっと私は受け入れられないから。

答えなんて要らない。

でも、いつまでもこんな私のままだと君はきつと悲しんでしまう。君にはいつまでもあの元気な笑顔でいて欲しい。

だから私は強くならなくちゃいけない。

答えなんてなくても、大丈夫なように強くならなくちゃいけない。

「君のためなら私は絶対に強くなるよ。君が笑ってくれるなら絶対に強くなる。だからね・・・お願い」

私はベンチから立ち上がって背筋をピンっと伸ばした。そして、すでに雲がなくなった青い広々とした空に向かって左手を伸ばした。「頑張るから、君はそこで見守っててね」

空へと伸ばした左手は、何かをつかもうとするように空を踊る。その左手の薬指には、大切な人からの最後の贈り物が光り輝いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6119n/>

---

雨の中で

2011年1月14日21時40分発行